

奈良佐保短期大学におけるキャリアデザイン科目授業実施報告

Class Implementation Report of Career Design in Nara Saho College

碓 ともみ

IKARI Tomomi

2013, 2014, 2015 年度における, 奈良佐保短期大学の基礎教養科目であるキャリアデザインの授業実施報告とする. 15 コマの授業うち 13 コマは筆者が担当し, 2 コマ(2015 年度は 1 コマ)は大橋篤氏が担当した. 当科目は, 必修ではないが修得が推奨されている「学科推奨科目」として前期の講義が設定されており, 受講者は主に両学科の 1 回生で, 毎年 3 クラスに分けて授業が行われている(受講者数: 2013 年度 153 名, 2014 年度 121 名, 2015 年度 117 名). 当科目では, 受講生自らのキャリアを主体的に描けることを目的に授業を実施した. 受講生が自分の過去や現在から未来を描きだせるように自己分析や他者理解, 社会に出るための準備としてビジネスマナーや就業力を理解し, 自らのキャリアプランニングの作成まで実施した. その結果, 経済産業省が 2006 年度から提唱している「社会人基礎力」(「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」)の 3 つの力のうち「前に踏み出す力」「チームで働く力」は, グループワークを取り入れた授業内振り返りシートや学生「授業アンケート」のコメントから関心度や満足度が高く成果はあった. 一方で, 「考え抜く力」を要する自らを深く考える個人ワークの「キャリアプランニング」「将来の姿をみつめる」授業に対して難しさを感じていることが分かり課題が残った. そのため, 今後自己理解を促す授業内容と自己探索する時間を十分にとるなどの検討を進め授業改善を行いたい.

キーワード: キャリアプランニング, 自己分析, 他者理解, 就業意識, ビジネスマナー
Key Words: Career planning, Self-analysis, Understanding of others, Work awareness, Business manner

1. はじめに

キャリアデザインとは, 自分がどの様に生きたいか, どの様な人になりたいかを考え, になりたい自分になるための「設計図」もしくは「見取り図」のことである. 人は特に「人生の節目」(進学・就職・結婚など)に何らかの選択をしていくことになるが, その選択を主体的に考えて人生づくりをしていくことである. 本稿は広義のキャリアデザインの中で, 特に本学生の今後の「就職」「将来」について着目していくこととする.

昨今, 多様な雇用形態や経済状況の他「仕事が合わない」「人間関係が上手くいかない」等の理由で, 就職 3 年以内に離職する若年者が約 3 割以上いるという現状である. 平成 23 年 3 月新規学校卒業者の離職率(厚生労働省)をみると, 短期大学卒(41.2%)は大学卒(32.4%)を上回る高い離職率であり, 前年比 1.3 ポイント増であった.

その一因として, 特に短期大学は 2 年間と短い期間の中で, 学生が就業意義や人生に関してよく考えずに就職してしまうということがある. 自分のことを知り, 社会を知り, 他者を知り, マナーを知ることの大切さを気づき, それを踏まえた上で社会に順応していきけるかが重要であり, 単に「就業力の養成」だけではなく, 社会に出てからの「働き続ける力の養成」にも注力していく必要があると筆者は考えた.

そこで, 筆者が担当した 2013, 2014, 2015 年度における「キャリアデザイン」授業においても受講生自らがキャリアを主体的に描けることを目的とした授業を実施した. 当科目は基礎教養科目中の必修科目ではないが修得が推奨されている「学科推奨科目」として前期の講義が設定されており, 受講者は主に両学科の 1 回生で毎年 3 クラスに分けて授業が

行われている（受講者数：2013年度153名，2014年121名，2015年度117名）。15コマの授業のうち13コマは筆者が担当し，2コマ（2015年度は1コマ）は大橋篤氏が担当した。次章でシラバスについて詳細に述べる。

2. シラバスと題材選び

2013年度から毎年シラバスを改訂しているが，本稿は2015年度キャリアデザイン授業シラバス（表1）を参照とする。シラバス作成にあたりビジネスマナー（2, 3, 4, 5回目），自己理解（2, 6, 9, 14, 15回目），他者理解（4, 6, 7, 8回目），社会・仕事理解（1, 7, 9, 10, 11回目），チームで働く力（9, 12, 13回目），キャリアプランニング（10, 14, 15回目）を主な項目とし，授業を通して受講生が自らを振り返り，自己思考や他者思考から主体的に将来を考える力を養うことを念頭において作成した。

ライフステージを鑑みて，高校生から短期大学生に移行した今は，大人として大切なビジネスマナーを意識させるために，シラバスのはじめに時間をかけて組み込んだ。まず他者に声を出して伝える言語的表現と表情で伝える非言語的表現の両面から学べるように，実際に伝わる挨拶や他者に対しての声の掛け方を身体を動かしながら学べるようにした。

その中で筆者前職の経験（航空会社勤務）からの題材として「機内アナウンス」を取り入れ，不特定多数に対して動じず伝えていくこと（自己表現）を体験させた。この「機内アナウンス」は3年間を通して授業最終回で受講生に実施したアンケート「心に残った授業」（表2）で1位となった。授業内に行う振り返りシートのコメントでは，「初めての経験で楽しかった」「他の人が上手にアナウンスをしていた」という声が多数あり，新しい経験のもとで自己表現力と経済産業省が2006年度から提唱している「社会人基礎力」で求められている12の能力要素の一つである「傾聴力」の両方を楽しみながら学べたようだった。「社会人基礎力」についての詳細は，後述する。

学習ワークショップは，「適材適所を考える」（Ⅰ）・「PBL課題解決型学習」（Ⅱ，Ⅲ）合計3コマ実施した。題材として前者は会社づくりから必要な人材とは，後者は専門コース（こども・栄養・福祉・ビジネス）に即した少子化・高齢化社会の題材をしてグループワークでプレゼンテーションまで実施した。

授業終盤には自己分析のもと，自分にとっての理想の将来の姿を構築し，それに向かうためにこれからの学生生活をPDCAサイクル「計画（Plan）・実行（Do）・評価（Check）・改善（Act）」に沿ってワークシートを用いてキャリアプランニング（アクションプランを作成）をしていった。

表1 2015年度キャリアデザイン授業シラバス

1	プロローグ・キャリアとは？
2	自己紹介スピーチ
3	挨拶の仕方と声の出し方
4	大切な言葉
5	機内アナウンス
6	嫌われる人（人との関わり方・人間の本質）
7	働く意味
8	「学ぶ」「教えてもらう」難しさ
9	学習ワークショップⅠ（適材適所を学ぶ）
10	人生論（大橋篤氏担当）
11	クレーム対応
12	学習ワークショップⅡ（PBL課題解決型学習）
13	学習ワークショップⅢ（PBL課題解決型学習）
14	キャリアプランニング（PDCAサイクルに沿って）
15	ふりかえりとまとめ（将来の姿をみつめる・アクションプラン）

表 2 心に残った授業

	1 位	2 位	3 位
2013	機内アナウンス	嫌われる人	クレーム対応
2014	機内アナウンス	クレーム対応	挨拶の仕方と声の出し方
2015	機内アナウンス	課題解決型学習	嫌われる人

表 3 難しかった授業

	1 位	2 位	3 位
2013	キャリアプランニング	自己紹介スピーチ	挨拶の仕方と声の出し方
2014	キャリアプランニング	課題解決型学習	将来の姿を見つめる
2015	キャリアプランニング	学ぶ・教えてもらう	将来の姿を見つめる

3. 授業到達目標

コミュニケーションや実践を通して、自分のことを知り、社会を知り、他者を知り、マナーを知ることから、社会人として必要な能力である「社会人基礎力」を高め、将来の自分の姿を明確にしていくことや協働意識を自然に持たせ、そこから自分のキャリアプランニングを自立的に立案していくことで、今何をしなければいけないのかということを感じさせることを授業到達目標とした。

4. 授業実施方法

4-1 全員参加型授業

アクティブラーニングを中心とした授業形態とした。6名前後のグループでのディスカッションやワークを通して、ブレインストーミングを取り入れ自由な発想や意見をまとめて発表していく。相互理解や他者の意見を尊重する効果をねらう授業である。

4-2 パフォーマンス型授業

実際に全員の前で身体を動かし、ロールプレイから体得してもらう授業形態である。例えばクレーム対応の授業では、流れを学習した後で、グループで対応を考えてもらい、店側、お客様に分かれて声を出しながらパフォーマンスを披露し、それについてクラス全体で共有していく。自らの考えを言語・非言語的表現ができることを期待した授業である。

4-3 協働意識を持ったグループ責任型授業

ワークショップをする上では内容も大切であるが、個人ではなくグループ評価も大切である。この授業ではグループ評価に重きを置き、グループ内で役割を決めて進める授業形態である。発表やプレゼンテーションをする授業では、全員が積極的に参加するとは限らないので、プレゼンテーションの評価をグループ毎とし、グループ員の責任はグループで負うこととする。グループ責任型授業をすることで、積極的に参加しないと他のメンバーの評価も下がるという意識が働き、自分が出せる役割の中で仲間と粘り強くやり遂げる力を育成できる授業である。

5. 「授業内アンケート」「学生授業アンケート」からの考察および成果

毎年「心に残った授業」「難しかった授業」を筆者作成アンケートや聞き取りから順位をつけた。「心に残った授業」は、授業最終回（15コマ目）の理解度チェックテストの中に質問として組み込み、受講者全員にその授業内容と理由を記述させた。「難しかった授業」は14回目の授業内に無作為に各クラス10名に授業内容とその理由を聞き取りした。それぞれの項目の上位3位までの結果（表2, 3）から全員参加型授業（4-1）、パフォーマンス型授業（4-2）を好む傾向があることが考えられる。対応マニュアルがあるものからパフォーマンスする授業「機内アナウンス」（全年度1位）、「クレーム対応」（2013年度3位、2014

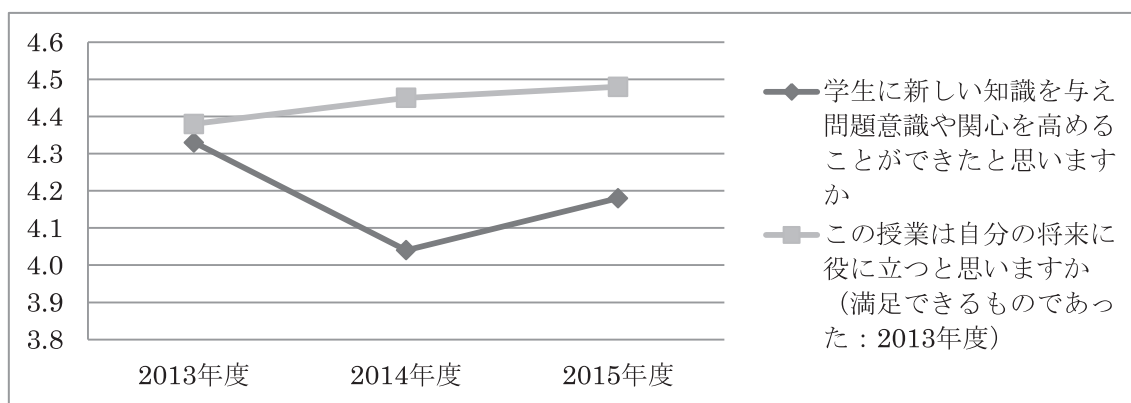


図1 「学生授業アンケート」の総合評価3年間の推移(5評価中)

年度2位), またグループ内での自由な意見を出し合う授業「嫌われる人」(2013年2位, 2014年3位)にポイントが集まった。しかしながら, 自己探索に焦点を当てた授業「キャリアプランニング」「将来の姿を見つめる」に関しては, 「自分のことを深く考えた経験がない」との声が多く, 自己分析からの自己理解に苦慮したようである。

2014年度から, 協働意識を持ったグループ責任型授業(4-3)を展開し, 新たに課題解決型学習/プロジェクト学習(PBL: Problem Based Learning/Project-Based Learning)を授業に2コマ入れた。PBLとは, 身近な問題や事例からグループで問題を発見し解決しながら課題であるプロジェクトを進めていく学習である。導入初年度はグループ内での役割分担や課題に対する問題発見から改善策までの行程をすべてグループ内で任せて行ったことでグループ内での温度差が浮き彫りになり, 「難しかった授業」(表3)2位, それに連動して2014年度「学生授業アンケート」「学生に新しい知識を与え問題意識や関心を高めることができたと思いますか」(図1)の評価(4.33から4.04前年度比0.29)が下がった。

それを踏まえて, 2015年度のPBLの授業では各グループにリーダーを立てて, リーダーを中心にグループ員の役割を決めてから課題に取り組むことにした。それによって各自の責任が明確になり, 相互理解や協働意識の向上にもつながり, 更に発表内容から考察力に優れたものが多かった。その結果2015年度の心に残る授業の2位となり, 「学生授業アンケート」「学生に新しい知識を与え問題意識や関心を高めることができたと思いますか」

(図1)の評価(4.04から4.18前年度比0.14)が上向き, 協働意識を持ったグループ責任型授業(4-3)の成果があったと思われる。

6. 理解度チェックと評価方法

(1) 毎回授業終了10分前に受講者全員に実施している各コマについての振り返りシート(筆者作成, 質問内容: 授業は役に立ったか, その理由, 自由記述)(2)「学生授業アンケート」(図1)(3)中間レポート(働いている人にインタビュー)(4)PDCAサイクル「計画(Plan)・実行(Do)・評価(Check)・改善(Act)」を用いて目標設定から自分のアクションプランの作成(論述テスト2015)(5)仕事の未来計画表(論述テスト2014)(6)卒業5年後・30年後のキャリアビジョンを記述(論述テスト2013)(7)卒業6か月後の自分の姿を記述(論述テスト2015), その他, 積極的授業態度や出席率等を総合的に評価し単位を認定した。

毎年必ず受講者にキャリアビジョンに関する理解度チェックテストを行い, 考えを文章化することにより自己目標を明確にさせることを実践した。テストの出題項目は事前に6月中旬と7月中旬に伝えており, 自己探索するための時間を与えた。

その結果, 上記(4)から(7)の出題からの論述文は, 最終行まで各自それぞれの考えを素直に記述しているものが多く, 未来に向けた人生設計が指示通りに書かれていた。

7. 就業意識の改革

当科目を受講している3クラス全員に授業中挙手にて「今までにアルバイト経験はあるか」との聞き取り調査をしたところ、各クラス8割以上の受講生がアルバイトを経験または継続していた。また、挙手した受講生のほとんどが、アルバイトは何かとの問いに「働くこと、お金を稼ぐこと」と意見を述べた。それ故に就業することをアルバイトの延長線であると考えた受講生は少なくないということが授業中の聞き取りで分かった。

そこで、授業シラバス(表1)7回目の「働く意味」の授業の中で、①ニートをどう思うか②なぜ人は働くのか③なぜ3年以内に離職してしまうのかをグループに分かれて話し合いをしながら、学校を卒業して働く仕事をアルバイトと離して捉えさせ、雇用形態や労働市場を正しく理解することで、自分の将来に置き換えて就業意識の改革を進めた。しかし、毎授業内で行う振り返りシートの自由記述から「自分が描く理想と現実がかけ離れている」「夢が定まっていないから雇用形態まで考えていない」との意見もみられたため、学生から社会人への移行時期の過ごし方や考え方をコマに関わらず授業の随所に入れ、その都度クラス全員で意見を出し合い共有していった。

6月の中旬に中間レポートとして、「働く人にインタビュー」を課題とした。文献・インターネット等で周囲の働く人の職業について詳細に調べることにより、世の中には多種多様な仕事があり選択肢がたくさんあることに気づいてもらえようとした。また、インタビューの相手が保護者や学校の先輩などにアプローチすることが多く、身近な有職者とコミュニケーションの機会が生まれ、自然と就業意識の向上につなげるようにした。

8. 人生論

毎授業の開始時にアイスブレイクを10分とり、筆者が経験した出来事や失敗談・成功談を織り交ぜながら、実社会の話を入れることで人生や就業の大切さを伝えた。

大橋篤氏担当の講義(2015年度10回目授業)では、キャリアを積むこと以前に「人間としての品格」(当たり前の人常識・他者への思いやり・家族の大切さなど)をこれまでの人生経験をもと進められた。公共浴場での行動(脱ぎ方・桶などの使い方・次の人への配慮など)まさしく人としてのマナーを受講生に伝えるものであった。当たり前のことや身近なところに大切なことが隠れており、そのことを再認識させられた授業となった。その後、各クラス4、5名の受講生からの口頭での聞き取りや授業最終回で受講生に実施したアンケート「心に残った授業」での記述から、「日常の生活態度を考えさせられるものとなった」「社会人として恥ずかしくないマナーを身につけたい」との意見が毎年寄せられ、受講生もマナーの大切さを認識したことが分かった。

9. 総合的成果と今後の課題

受講生にはキャリアデザインという言葉に馴染みがなく、何をする授業なのかと疑問を持って臨む者がほとんどであるため、授業初回時に受講生自らがこれまでの人生で自然にキャリア(人生)について考え、節目を選択してきていること(デザイン)を認識させることから始めた。今後の複雑かつ大きな節目(就職・人生)を自立的に乗り切り、就業持続力を養うためにバランスよく授業を組み立てた。その要素として、自己分析から自分を知り、コミュニケーションから他者を知り、社会人の話や文献から社会やマナーを知ること15コマ(中間レポート含む)の授業を通して修得し、将来を考える良い機会となったと思われる。

社会に出る準備として、授業はどのクラスもほぼ毎回席替えを実施した(13回目を除く)。それには、多くの人との関わりで培われるコミュニケーション力を高める意図があった。毎回変わる仲間とのグループワークを通して、コミュニケーション、協働意識、他者への思いやり、責任感を育成できたと思われる。それは2014年度受講生に対する「授業内アンケート」自由記述で「人が違えば意見も違いますし、色々な人とコミュニケーションが取れるので、いい経験になります」との記述をはじめ、毎年受講生から「席替えは初め嫌だった

が、クラスの全員と話せてよかった」「人のことを知る楽しさを知った」との授業中での複数の意見から、他者とのコミュニケーションによって自己変容をもたらされたようである。

その他、毎回授業内で行なわれる振り返りシートの自由記述欄に個人的な重い質問（自己について・人間関係）をする受講生も毎年7～8件あり、相談できる人がいない悩みを抱えているがいることが分かった（後日個々に封書にてアドバイス済み）。

社会に出るためのビジネスマナーでは「挨拶」「表情」「心を込める」ことに力を入れ、座学ではなくひとり一人「分離礼」「言葉の掛け方」を実践することで体得でき、なぜ人は挨拶をしなくてはいけないのかということクラス全員で考え、改めて人間関係の構築が大切であることを全員で共有した。

そして、自己の言葉を使って自分を知り、他者を知ることで自己表現することに対して自信を持ち、自己発言をいかに他者に聴いてもらうかという観点から、自らも他者の発言を聴くことを学べた。2回目授業の自己紹介スピーチの時には上手く他者に伝えられなかった受講生も、授業の回数を重ねていくうちに、人前で話すことに慣れてきたように授業観察から伺えた。

2014年からの新たな試みであった課題解決型学習のグループワークは、何も無いところから仲間何かをつくり上げ、それを発表することは難しいことでもあるが、ファシリテーションを加えるだけでやりがいを感じるということが分かった。ものごとに対して問題意識を持ち、問題を発見すること、そこからどの様に改善していくかというプロセスが大事であることの理解や情報収集の仕方を学んだが、今後はさらにその情報から読み取れる事実や考察をグループで進めていけるように、ファシリテーションの工夫が必要であると考える。

また、常に授業全員参加を意識してどの様な意見に対してもすべて尊重するようにした。どの受講生も初めは正解を求めたがり、正解が分らないと答えない風潮であったが、間違っても良いので自分の意見を言うことを重要視した。その中から自分のアイデンティティを確立することと、自分がどの様なことを言っても聴いてもらえるという自信をもたせる様に授業を進めた。自らも参加できる授業は、自らが持つ知識を披露できる場ともなり、自信が芽生えてくるものだと受講生自身が理解したようだった。実際、回を重ねるごとに活発な発言をする受講生が増えていき、すべてのクラスの出席率は90%以上と非常に高く、それと比例して「学生授業アンケート」（図1）で「将来役に立つ授業」と回答する受講生が増えた（5評価中2013年度4.38、2014年度4.45、2015年度4.48）。

しかし、「学生授業アンケート」（授業レベル）（表4）を2013年から2015年まで調べると、受講生が授業のレベルを「非常に高い」「やや高い」と感じている。3年間の平均は14.8%となり毎年増加傾向である。

その原因として、自己分析が必要である「難しかった授業」（表3）授業内容レベルが「非常に高い」もしくは「やや高い」と受講生が感じたからではないかと推測した。受講生が「難しかった授業」に挙げた「キャリアプランニング」「将来の姿をみつめる」の授業は個人ワークシートが中心であり、自分の強みを素直に受容できない受講生が多く、2コマの中で自己分析や自分の将来について考えるきっかけは作れたが、深く考えていく時間が不足していたことは否めない。「難しかった授業」（表3）の上位に挙げられた「キャリアプランニング（14回目）」「将来の姿をみつめる（15回目）」等の自己理解を促す授業については、次年度以降早期に行う等の再検討・改善が必要であると考える。

表4 「学生授業アンケート」（授業のレベル）

	非常に高い	やや高い	適切	やや低い	非常に低い
2013	8.1%	16.1%	71.8%	3.2%	0.8%
2014	6.7%	20.0%	69.5%	1.9%	1.9%
2015	11.3%	26.4%	61.3%	0.9%	0.0%

表5「社会人基礎力」3つの力/12の能力要素（経済産業省）

前に踏み出す力	考え抜く力	チームで働く力
主体性 働きかけ力 実行力	課題発見力 計画力 創造力	発信力・傾聴力・規律性 柔軟性・状況把握力 ストレスコントロール力

10. まとめ

これまでたびたび挙げてきた「社会人基礎力」とは、2006年に経済産業省が提唱しており、3つの力と12の能力要素から構成され、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」と定義されている。社会が求めている力であり、社会で活躍するためには必要不可欠な力と言われている。

当科目は、その「社会人基礎力」を養いながら受講生自らのキャリアを主体的に描けることに重きを置いた。

15回の授業を通して、「社会人基礎力」3つの力（表5）の中の「チームで働く力」「前に踏み出す力」は、グループワークやパフォーマンス型授業等を通して実行力、働きかけ力、発信力、傾聴力が特に養われたようであり、「心に残った授業」（表2）や「学生授業アンケート」でも満足度が高く、自己表現や他者理解の面において成果はみられたが、逆に受講生が感じる難しい授業（表3）の結果から苦手と思われる「考え抜く力」については、この機会に考えるきっかけは作れたものの、個人で考え抜く力を要するキャリアプランニングに必要な主体性（自分のことを自分で考える）、計画性（目標からのアクションプランを立てる）、創造力（将来の姿をみつめる）の強化には至らず、各能力要素向上のために検討が今後必要であると考えます。

「考え抜く力」の向上を図るためには、ものごとに対して常に「本当にこれで良いのか」と疑問を持ち、「なぜそう思ったのか」を追求していくことが必要である。そしてそこに辿り着くためには、無限に広がる多くの情報の中から取捨選択を重ね、解決策を主体的に見出していくことが必要であると筆者は考える。具体的方策として、受講生の発言に対して必ず「なぜそう思ったのか」を問い掛け、論理的に考えさせるという積極的な取り組みが今後必要であろう。論理的に考える習慣をつけることで、自分と向き合う時間が増えることが想定でき、自己理解を深めることや将来に目を向けることが期待できる。そこから「今自分は何を考えているのか、できるのか、すべきか」という自己探索からキャリアプランニングを構築し、自らが責任を持って、就職活動の方向性や未来のキャリアを選択していく礎を築くことが本科目の意義があると考えます。

最後に、当科目の初年次教育での実施にも大きい意義があると感じる。入学時にそれぞれが各学科・コースでの専門資格を取りに本学に来ているものの、本当にこれでいいのかと悩む学生は少なくない。また、目標を持たないまま中途退学してしまう学生もいる現状の中、短期大学の2年間を充実したものにするためには、早い時期から自分をみつめ目標を立て、アクションを起こすことで、自らが納得できる人生づくりの一步になり、当科目はその重要な役割を果たしていると筆者は信じている。

また当科目を履修することで、学生が自立的に未来へ向かうキャリアビジョンを描き実行し、目的意識のもと各自の専門科目への学習意欲（専門知識）につながると筆者は考える。

さらに「社会人基礎力」「専門知識」の他、「人間性や基本的生活習慣」（マナー、思いやり、倫理観等）、「基礎学力」（読み書き、計算、基本的ITスキル等）も必要不可欠であり、様々な経験を通して、相互に作用しながら向上していくことも期待したい。

もちろんのことであるが、今までどおり教職員も真摯に学生と向き合い、それぞれの立場から多様なキャリア支援を継続的にしていくことも大切であることを付言しておく。

引用・参考文献

- 1) 岩上真珠, 大槻奈巳:『大学生のためのキャリアデザイン入門』, pp.179-183 (2014)
- 2) 経済産業省:「社会人基礎力」, <http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/> (2015.11.30 アクセス)
- 3) 厚生労働省:「新規学卒者の離職状況 (平成 23 年 3 月卒業者の状況)」, <http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000062635.html> (2015.11.30 アクセス)
- 4) 白井章詞:「キャリア教育と学生の進路変更:地方の私立大学でのキャリア教育科目を事例として」, 『キャリアデザイン研究』, 11, pp.87-96 (2015)
- 5) 三保紀裕, 神原歩, 木原麻子, 中尾都史子, 湯口恭子, 上田さやか:「実践・事例報告 キャリア教育科目の効果と定着に関する検討:縦断調査に基づく事例報告」, 『地域社会におけるこれからのライフスタイルとキャリア形成 (日本キャリアデザイン学会第 12 回研究大会・総会 (2015 年度大会) 資料集)』, pp.27-30 (2015)